

ネームプレートに「助産婦」を

三岩 澄子

小樽協会病院・総婦長

新年明けましておめでとうございます。

助産婦の皆さん、皆さんは、ネームプレートに助産婦であることをはっきりと明記し、妊産婦さんが安心してお世話を受けられるように配慮されていますか。

産婦：ああ、よかった、助産婦さんが来てくれて。昨夜は若い看護婦さんにお世話をしてもらったんですよ。

助産婦：いいえ、昨夜お世話をさせていただいた者は、若いけれど、助産婦の国家資格を持ったレッキとした助産婦ですよ。それに経験も踏んでいるし、心配はありませよんよ……。

産婦：そうでしたか。若いので、助産婦さんではないと思っていました。

助産婦：うちでは、妊婦検診や分娩介助は、助産婦しかしていませんので安心してください。

——皆さんは、このような場面に遭遇されたことはありませんでしょうか。

マスコミによる情報が過剰なほどの今日、一般の人々は情報の渦中にいて、個人のニーズも多様になっています。そして誰もが、当然のこととして「良質のケアを受ける権利」を保障されたいと願っています。

さらに、出生人口が1夫婦当たり1.53人と減少しているのですから、1人1人の誕生は、ご家族にとっても、社会にとっても望まれた、しかもかけがえのない大切なことではないでしょうか。このような時だけに、私たちにっては「あたりまえ」として考えられていた助産婦による助産業務が、助産婦以外の者によって実施されているかもしれない、という「不安な気持ち」をこの産婦さん

は表出されたのかもしれませんがね。

いっぽう、日夜わが身も厭わず母児の安全と安楽を願って勤務し続けている助産婦の中には、ネームプレートによる助産婦という職種の明示ができなくて悩んでいらっしゃる方々も多いことを耳にします。その原因は何なのでしょう。

さて、当院は……と見渡せば、院長はじめ全職員が、共通して、名字だけの名札を付けているのです。こうなった経緯は単純な理由です。みんな同じでよいだろう、という軽い気持ちでネームプレートをつけ始めたからだと思います。変更となると、手続きが面倒な上に厄介な問題が絡んでくるので、波風立てずにそっとしておくほうがわが身の安全というものなのかもしれません。「たかがネームプレートで」といとも簡単に考えていたはずのことが、今日、明日に解決できる問題でもなさそうです。

しかし、異なる資格を持った者が、個々の果たすべき責任を自覚し、個々の専門性を発揮し合い、活用し合って、より高度なサービスを提供できる方法を見出す必要があるのでは……と疑問が脳裏をよぎるのです。個々の責任を果たすことのできる職場環境を準備することが、職場の活性化、ひいては質の高い患者サービスにつながるのではないかと考えています。

皆さん、今年は、叡智を出し合って自己主張と調和に挑戦してみませんか。私は仲間と共に、地域住民のニーズに応えられ、付加価値の高いケアサービスを提供するために、1人1人が個々の責務を果たしながら楽しく働き続けられる職場環境づくりを目標に歩むつもりです。